



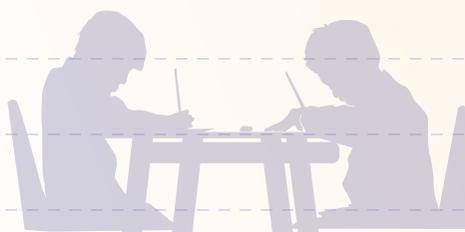
特集

「統一合判」 中学入試レポート vol. 3

“私学の校風”を 感じてみよう。

わが子に合ったタイプの 私学を探すために。

5年生の「統一合判」テストも今回で3回目。大勢の仲間が集まって力を競う、こうしたテストの雰囲気や形式にも、ようやく慣れてきたのではないのでしょうか。これから再来年2月の入試本番までに、保護者の皆さんは、学校見学をしながら、わが子の受験校を考えていくことになります。そこでベストの受験校を選んでいくうえでのヒントをお伝えするために、今回は「私学の校風」を感じてみよう。～わが子に合ったタイプの私学を探すために～と題し、それぞれの私立中高一貫校の校風やカラーの違い、さらに私立ならではの男子校、女子校、共学校の違いについてご紹介します。



首都圏模試センター

私学特有の校訓・校是からわが子に合ったユニークな校風を感じ取る。

“さあ、中学受験！”…でも実際にどの学校を受験したらいいの？といった相談が毎年多く寄せられます。高校や大学受験と異なり、中学受験をするのはまだ年端も行かぬ小学生。つまり「学校選び」については、保護者の皆さんが主体となって進める必要があります。

では中学受験の学校選びにあたって、意識すべき最大のポイントとは一体なんでしょう。それはズバリ「わが子にあった学校かどうか」という点です。

「わが子にあった学校」にもいくつかの観点がありますが、最も大切なことは、それぞれの学校の「校風」や「カラー」がわが子に合っているかということです。その点を重視して「偏差値や進学実績だけにとらわれない学校選び」をすることが、充実した6年間を過ごすうえでの最大の秘訣といえます。

以前に取材でお話を伺った、あるミッション系の女子校の校長先生は、「校風とは、まさに風のようなもの。たとえば校内をしばらく歩いてみると、肌で感じられるような雰囲気です。在校生の様子や表情からも感じられるものだと思います」と話してくれました。

私学にとって「校風」や「カラー」は、創立者による「建学の理念（＝教育理念）」と同じように、教職員や生徒、保護者、卒業生（OBやOG）など、学園に関係するすべての人によって、長い年月をかけて育まれてきたものです。たしかに「校風」や「カラー」は公立学校にも存在します。しかし約10年のス



柔道の講道館創始者であり、日本で初めてのJOC委員でもあった嘉納治五郎。スポーツの発展に留まらず、教育の分野でもその辣腕を発揮しました。

パンで教員が転勤を余儀なくされる公立中高とは違い、歴史の古い私学では130年以上もの間、連綿と受け継がれ、熟成されてきたものがあります。

それが各私学の「校訓」や「校是」に反映されている場合もあれば、その「校訓」や「校是」によって、各私学の「校風」や「カラー」が生み育てられたという見方もできます。

全国トップレベルの進学校として知られる兵庫県の灘中高の校訓は、初代校長であった嘉納治五郎による「精力善用 自他共栄」という言葉。ちょっと変わった校訓ですが、これは現在も講道館に受け継がれている言葉でもあります。後に灘中高の第5代校長を務めた故・勝山正麿先生は、この校訓の「精力善用」を「生徒は運動しているか勉強しているか寝ているか、それだけでいい」と、ユーモラスに意識してくれたことがありました。「自他共栄」は、まさに現代に求められる「共生」の意味。これが現在も灘に受け継がれている精神を象徴する言葉で、非常に自由な校風のもとでも、やるべきときには学業に集中することができる、灘中高の生徒の気質や姿勢を育ててきたともいえるでしょう。

首都圏に4つの女子中高一貫校を有する大妻女子大学系列（大妻、大妻多摩、大妻中野、大妻嵐山）の校訓は「恥を知れ」。これは創設者であり、日本の女子教育界の草分け的な存在でもある大妻コタカのことばですが、本来の意味を



特集 “私学の校風”を感じてみよう。

わが子に合ったタイプの私学を探すために。



大妻多摩の広大なキャンパス内にある学祖・大妻コタカ像。創立者の想いは現在まで脈々と受け継がれています。

知らない人からすれば、少し乱暴な印象を受けるかもしれません。このことばは決して他人に対して発しているのではなく、人に見られたり、聞かれたりして恥ずかしいような行動をしていないかと、“自分を戒める”ためのことばだそうです。

また同系列校で使われている「ごきげんよう」という挨拶にも、当時の女性を取り巻く社会情勢を反映したエピソードがあります。1908年に裁縫と手芸の家塾として創立された大妻学院ですが、1919年には日本初の夜学部を設置。昼間仕事をして家計を助けている女性が、さらに実技を身につけて自立ができるようにと開設されたものでした。

夜間部の生徒たちは、仕事をする必要のないお嬢様たちが帰宅するころに登校します。双方の生徒がすれ違ったときに、夜間部の生徒が引け目を感じないように、「ごきげんよう」の挨拶を採用したそうです。

現在では気取った挨拶と思われがちな「ごきげんよう」ですが、そこには日頃から挨拶や感謝の気持ちを言える女性に育ててほしいと願った創設者の想いと配慮がうかがえます。

「ごきげんよう」は他にも●跡見学園や●東洋英和、●学習院女子などでも創設時からの伝統として採用されています。代々受け継がれてき

た挨拶や習慣からも、その学校の歴史＝風土＝校風を探ることができます。

大正時代に日本に10数校だけ設立された、当時の超エリート校である旧制七年制高等学校を前身とする●武蔵の校訓は「自調自考」。「自ら調べ自ら考える」という意味の言葉ですが、現在では◎渋谷教育学園幕張と◎渋谷教育学園渋谷でも校訓として採用されています。「自由な私学」の代名詞といわれる●麻布とも並び称される武蔵ですが、この「自調自考」によって自由でアカデミックな校風が長い年月をかけて育まれてきた部分も大きいようです。

また、多くのミッション・スクール（カトリック・プロテスタントともに）で掲げられてきた「Men for Other's (For Other's) = 他者のために生きる」というスローガンも、「他人を思いやり、奉仕の気持ちを大切に生きて生きる」という意味で、この言葉がキリスト教系の私学の校風や教育姿勢の形成に果たした役割は非常に大きいといえます。

仏教系の私学にも「他者への思いやり」や「人間の尊厳」、「いのちの大切さ」を教える学校が多くあります。比較的穏やかで、温かな雰囲気を持つ学校が多く、これも公立学校とは違った特色を形成する私学ならではの校風といえるでしょう。

私立中高一貫校のルーツでも ある男子校・女子校の存在

私立中高一貫校を目指す受験生親子にとって、「共学にするか別学（男子校・女子校）にするか」は学校選びの重要ポイントではありますが、いまこの冊子を手に行っている保護者の皆さんの多くは、「共学が当たり前」の時代と環境のなかで育ってきた世代ではないでしょうか。

すでに全国の公立中学校や公立高校の大半が共学となっている現代では、男子校・女子校はすでに“少数派”であり、そのことが私学の最たる特徴となっています。

男子校には、もともとの（旧制中学校の時代からの）伝統からか、学業に向かう姿勢は厳しさを持つ反面、かつては「バンカラ」ともいわれただらかさや、とても自由な校風を持つ私学が多くありました。

一方、女子校の多くは、明治の初期までは女子に与えられなかった「学問の場」を設けるために創立されました。家政や裁縫、商業系の学校としてスタートした女子校も多くありましたが、時代を経て高等教育（大学）へ進学するための学校へと変化しました。そうした女子校には、躰や日本文化も大切にしている学校が多く、また女子だけが学ぶ環境が大切にされたため、独自の文化や「女子校らしさ」が生まれ、それが校風として醸成されたともいえます。

こうした設置形態の違いと、それぞれの特色や魅力を知り、わが子に合った（保護者がわが子に望む）タイプの学校を選ぶことも、志望校を選ぶうえでの大切なポイントになります。

もともと、明治～大正時代に創立された多くの私立学校は、男子だけの学校、または女子だけの学校としてスタートした経緯があります。男女共学（共修）が一般的になる前の時代、たとえば創立から百年以上の歴史を持つ私学は、ほとんどが男子校、女子校という形態で長い伝統を形作ってきました。古くは旧制の高等学校、高等女学校を見ても、公私ともにすべて男子校、

女子校だったことがわかります。

早くから大学進学でも高い実績をあげてきた開成、麻布、武蔵、女子学院、フェリス女学院、雙葉、桜蔭、横浜共立学園などが、いずれも男子校、女子校である背景には、そのような経緯があります。つまり、これまでに高い成果をあげてきた私立による「中高6年間一貫教育」のルーツは、もともと男子校・女子校にあったという見方もできるのです。

しかし、戦後の新たな民主主義教育と新学制が導入された際に、公立中学校はすべて共学となり、公立高校も（北関東から東北エリアの一部の県立校を除いて）ほとんどが共学校として再スタートしました。



女子校きつての高い進学実績を誇る桜蔭の建学の精神は「礼と学び」。知性と共に礼節も重んじています。

そして、男女共学が自然な形として世の中に浸透していくなかで、私学にも共学校が生まれ、あるいは男子校、女子校から共学化する私学も年々増えてきたのです。とくに1970年代後半（昭和50年代なかば）以降に新設・再開された私立中学校の多くは、共学校としてスタートしたか、あるいは開校後に共学化に踏み切り、現在に至っている学校がほとんどです。現在では先の伝統校と競い合うほどの高い進学実績をあげるようになった渋谷教育学園幕張、同渋谷などの共学校や、いま注目を集めている三田国際学園、開智日本橋学園、かえつ有明、東洋大学京北など最近の“共学化”校は、いずれも最近～比較的新しい時期に誕生した（生まれ変わった）、いわば“ニューウェーブ”の私学ということができでしょう。



特集 “私学の校風”を感じてみよう。

わが子に合ったタイプの私学を探すために。



2015年から共学化した開智日本橋学園国際バカロレアのMYP候補校に認定されるなど、世界に目を向けた姿勢が多く、受験生たちから高い支持を集めています。

いまこそ見直したい！ 男女別学の意義を考える

徐々に私学にも波及してきた「男女共学化」。しかし、先にあげたような長い伝統を持つ私学の男子校、女子校が、これまでに高い教育の成果をあげ、多くのファンを形成してきた背景には、やはり男子校、女子校ならではの魅力やメリットがあります。

男子校、女子校の良さは、その学校を卒業した方やわが子を男子校、女子校に通わせた経験のある保護者でしたらよくご存知だと思います。しかし逆にいうと、そういう身近な経験がない方にとっては、男子校、女子校のイメージは想像しにくいものです。

すでに小学生のお子様を持つ皆さんも実感していると思いますが、男子と女子の精神的・身体的な成長にはスピード（リズム）の違いがあります。

わかりやすい例をあげると、一般的に小学校高学年から中学1～2年の頃までは、男子と女子の精神年齢は、1歳～1歳半の違いがあるといわれています。つまり、その間に男子は男子だけで、女子は女子だけで学ぶことは、学習指導の場面でも生活指導の場面でも大きな意味や効果があることが、すでに多くの教育現場で語られているのです。またそうした実証データも海外の研究には数多くあるといえます。

とくに教科教育の場面では、男子の理解や良

い反応を促す質問の投げかけ方（教授法）と、女子に対するそれとでは、大きな違いがあります。たとえば男子に少し難しい問題をゲーム感覚で競うように投げかけると反応が良く、逆に女子には事前に丁寧な説明をしたうえで、確実に達成感を得られるような組み立てで、授業や問題の投げかけをしたほうが有効との報告もあります。つまりそれぞれの特質に合った授業や学習指導ができるのが、男子校、女子校の大きなメリットなのです。

いまでも、難関大学への合格実績（合格者数）で、全国上位を占める学校には、圧倒的に男子校、女子校が多いのは、そうした特質をふまえた指導や学習環境によるところが大きいのではないかと、多くの教育関係者からの声があがっています。

一方、生活面の指導でも、すでに中1の段階で精神的にも成熟しつつある女子へのアプローチと、まだ小学生の雰囲気抜けきらない男子に対するアプローチとでは、当然ながら違った形のほうが効果的です。とくに「キャリア教育」の場面などでは、この年齢の男子と女子とでは反応や吸収の違いが顕著に表れます。それゆえ、ほとんどの女子校では、中2くらいの早い段階から将来のキャリア（進路や職業選択）を考えさせるプログラムを設けていますが、男子校の場合には、もう少し先の段階（高学年）まで待ってから体験させるケースが多いのです。

社会的な意識の芽生えや、現実の目標を定めるのが早めな女子には、それに合ったタイミングで示唆を与える。また女子に比べてそうした意識の芽生えが遅い男子には、中学生の間に学習習慣をベースとした学力の土台を固めさせ、社会性や目標意識が高まった段階で、一挙に各自の希望する進路に向けてラストスパートをかけることを前提に、ゆったりと進路や職業を考えさせている私学が多いのです。つまり、こうしたさまざまな面で、「男子だけ」「女子だけ」の環境だからこそ、“できること”、“行いやすいこと”があるのです。

もっとも子ども（生徒）自身からすれば、各自の性格やタイプによって、「男子だけ」、「女子だけ」の環境のほうが、伸び伸びと過ごせるという子もいます。とくに小学生時代に、大人びた女子や、子どもっぽい男子の存在をわずらわしく感じていたような子どもにとっては、この中高6年間という一時期に限って、“男女別々”の環境のほうが過ごしやすと感じる子も少なくありません。

身近な例をあげれば、趣味やスポーツなど、一つのことに熱中することが好きな男子には、女子の視線を意識せずにいられる男子校のほうが、そうした部活動などに打ち込みやすい雰囲気があります。こうした思春期特有の問題に対応できるのも、男子校、女子校の魅力といえるでしょう。

それぞれの雰囲気を知るには まず足を運んでみることに！

男子校・女子校・共学校や各タイプの私学の雰囲気の違いを知るためには、やはり各私学に足

を運んでみるのが大切です。在校生がどのような表情で過ごしているかを自分の目で見ることで、お子さんにも、きっと自分なりの好みや希望が出てくることと思います。

実際、こうした入学前のリサーチをしたうえで学校を選んだ先輩たちに入学前と入学後のイメージギャップを尋ねると、男子校では「もっと騒がしくて大雑把かと思っていたが、意外と落ち着いていて、優しい先輩や先生が多かった」といった感想が、女子校では「もっとお嬢様学校っぽい雰囲気かと思っていたが、みんな明るくてうるさいくらい元気だった」といった感想が多く聞かれます。

つまり、それだけ大らかで、先生や先輩に温かく見守ってもらえて、友人たちと和やかに過ごせる環境や風土が、多くの私立中高一貫校にはあるということです。

私学には創設以来培われていた、さまざまな“個性”があり“顔”があります。錯綜する情報を精査し、実際に自分の目で確認することを忘れずに、わが子に合った学校選びを心がけてください。

●男子校、女子校、共学校の特徴

男子校

- ・女子の視線を気にせず好きなことに打ち込める。
- ・体育祭や文化祭などが盛り上がる。
- ・運動系のクラブ活動の選択肢が豊富。
- ・団結力が強い。

女子校

- ・大学の現役進学率が高い。
- ・学校が女性向けに設計されている。
- ・礼法などの伝統文化を重んじる学校が多い。
- ・男子に頼れないので自立した女性に育つ。

共学校

- ・異性との相互理解を深めることができる。
- ・比較的新しい学校が多い。
- ・明るくオープンな雰囲気の学校が多い。
- ・早くから社会の構成を学ぶことができる。



私学創設に携わった偉人たち

私学の創設には、明治～昭和初期に活躍した先人たちの熱い想いが込められています。

ここではその創設（大学含む）に携わった人たちのほんの一部をご紹介します。

自分が志望する、または気になる学校の創設者やその経緯を調べると、新たな学校選びのヒントが見つかるかもしれませんよ！

江原 素六

(1842年3月10日～1922年5月19日)

明治～大正期の教育者で政治家としても知られる。貧しい家庭に育ち、苦しい生活ではあったが、昌平坂学問所、講武所で学問を重ね、明治維新後は静岡県下で殖産興業と教育事業に取り組み、県会議員や沼津中学校長などを歴任する。またキリスト教徒として伝導にもつとめ、1889年には東洋英和学校幹事、後に校長に就任。1895年には麻布尋常中学校(後の●麻布)を創設、校長を務めるなど、日本の教育発展に尽力した。政治家としても衆議院議員に当選し、以後7回当選。1912年には政党人として初めて貴族院議員に勅選された。



井上 円了

(1858年3月18日～1919年6月6日)

新潟県長岡市の慈光寺で生まれる。早くから「哲学」に着目し、1887年には29歳の若さで現在の東洋大学の前身となる哲学館を創設。1899年には、その中等教育機関である京北中学校(現◎東洋大京北)を創設した。妖怪研究のパイオニアとしても知られ「お化け博士」の異名を持つ。円了の妖怪研究は合理的・実証的な立場に基づいた迷信の打破が目的であり、「不思議研究会」の立ち上げや、その調査研究の結果をもとにまとめられた『妖怪学講義』は高い評価を受けた。



下田 歌子

(1854年9月30日～1936年10月8日)

明治～大正にかけて活躍した女子教育の先駆者。1872年(明治5年)、女官に抜擢され宮中出仕する。後に皇后から和歌の才能を認められ「歌子」の名を賜る。

1879年に下田猛雄と結婚、宮中を辞す。後に夫が病に臥し、その看病のかたわら、自宅で『桃夭(とうよう)女塾』を開講。その後、塾の実績と皇后の推薦で、創設された「華族女学校」の教授に迎えられる。

1893年には女子教育の視察のため欧米。その帰国後「帝国婦人協会」を設立して女性の地位向上につとめた。

1936年の死去まで、生涯を女子教育の発展に捧げ、●実践女子学園や順心女子学園(現在の◎広尾学園)の設立に尽力した。



辰野 金吾

(1854年10月13日～1919年3月25日)

唐津藩の下級武士の次男として生まれ、1868年に父の実弟の養子となる。

1873年工部省工学寮(現在の東大工学部)に第一回生として入学。2年後には造船から造家(建築)に転じ、1879年に主席で卒業した。1880年には英国留学に出発して、ロンドン大学やW. バージェスの設計事務所で学ぶ。帰国後は工部省に勤務し、1884年には工部大学校教授に就任する。後進の指導にも熱心だった辰野は、その後帝国大学総長渡辺洪基の意向を受け、工手学校(◎工学院大学附属の系列大である工学院大学の前身)の創立を推進、運営にも尽力した。設計した建築物の頑丈さから「辰野堅固」とも呼ばれ、東京駅舎や日本銀行本店など、近代日本を代表する建造物も多い。



わが子にとってベストの 受験校選択をするポイントは？

～ 10月以降、盛んに行われる「説明会」や「学校行事」の機会に確かめよう～

わが子の受験校を選ぶうえで、何を物さしにするのか。家庭の考え方、保護者の期待、本人の将来への希望、本人の性格・タイプなど重視したい点は多々あります。

ここでは学校説明会や見学の機会に、ぜひ抑えておきたい14のポイントをご紹介します。

- ①教育理念や目標、その学校の6年間で身につけられる力が、わが子が社会に巣立ってからの新しい社会に求められるものか？
- ②その教育の方向性が、来るべき「2020年大学入試改革」にも対応し得るものか？
- ③今後の社会のグローバル化や激しい変化を見据え、そこで生き抜く力を育ててくれる教育内容かどうか？
- ④校風（カラー）が本人の性格に合っているか？
- ⑤男子校、共学校、女子校のタイプは、家庭の希望と合っているか？
- ⑥宗教色のある私学の場合、その背景（理念）に理解と賛同姿勢をもてるかどうか？



「開物成務」（校名の由来）、「ペン」は剣よりも強し（校章に図案化された格言）は開成の校風を象徴しています。

- ⑦進学校か付属校か、あるいは半進学校（半付属校）か？
- ⑧自由な学校か、規律正しい学校か？
- ⑨学習指導のスタンスや体制は、家庭の希望に合っているか？
- ⑩大学進学状況は納得いくものかどうか？また、将来性についてはどうか？
- ⑪クラブや学校生活はのびのびできるか？
- ⑫わが子が学校に楽しく通えて、友人関係や雰囲気溶け込めるかどうか？
- ⑬通学には無理がないか？
- ⑭その学校が、危機管理の面も含めて「安心して通わせられる」場所かどうか？

さらに、ここ数年の入試では、公立学校が進められている“教育の自由化”政策に対して、各私学がどのような（オリジナルの）姿勢を打ち出しているかが、父母のニーズと照らし合わせたときの大きな焦点となっています。

中高6年間の学習指導のノウハウや成果で、私学が公立中高をリードしていることは、すでに多くの保護者が認めるところ。そのうえで、私学ならではの教育のもと、21世紀を担う子どもたちが「より良く生きる」力を身につけるために、どのような“プラスアルファ”を与えてくれるのか。こうした点をトータルに見たときに、わが子の受験校として納得できるかどうか、親子の意思決定の大きなポイントになってくるのです。